

柔道ルネッサンス活動意識調査 ～2010年全国高校総合体育大会柔道競技監督会議出席者を対象に～

山田 利彦¹⁾ 金丸 雄介¹⁾ 石井 孝法¹⁾ 越田 専太郎²⁾ 小菅 亨²⁾

福見 友子³⁾ 上水 研一朗⁴⁾ 金野 潤⁵⁾ 柏崎 克彦⁶⁾

了徳寺大学・教養部¹⁾

了徳寺大学・健康科学部²⁾

了徳寺学園³⁾

東海大学・体育学部⁴⁾

日本大学・文理学部⁵⁾

国際武道大学・体育学部⁶⁾

要旨

本研究は山田らの「柔道ルネッサンス活動意識調査～2010年柔道ルネッサンスフォーラム参加者を対象に～」に引き続き、2001年から2011年の間、講道館と全日本柔道連盟との合同プロジェクトとして行われた「柔道ルネッサンス」について、2010年の全国高校総合体育大会柔道競技監督会議出席者に対してアンケート調査を行い、その認知度や効果、必要性等を把握し、2014年4月1日に発足した柔道MINDプロジェクト等の活動に示唆を得ることを目的とした。選手や会場使用のマナーについては改善に向かっていることが示唆される結果であったが、応援者のマナー、強化選手及び強化指導者のマナーについては、更なる改善が望まれる結果であった。柔道選手及び柔道指導者のマナーについて他競技と比べた場合、「どちらでもない」、「あまり良くない」とする回答の合計が6割前後になり、改善の必要性が伺えた。柔道ルネッサンスにより、柔道に対する意識は8割の者が「良くなった」、「まあ良くなった」ととらえており、この活動が柔道界にとって非常に有益な活動として認識されていた。活動の継続については、93%の者が必要であると認識しており、今後の柔道MINDプロジェクトにこうした意見を反映して欲しいと考える。

キーワード：柔道、柔道ルネッサンス、インターハイ、柔道マインド

A Survey on Consciousness of Judo Renaissance Project : A follow up case study of the participants at the Judo head coach meeting at the 2010 Interscholastic Athletic Meet.

Toshihiko Yamada¹⁾, Yusuke Kanamaru¹⁾, Takanori Ishi¹⁾, Sentaro Koshida²⁾,

Toru Kosuge²⁾, Tomoko Fukumi³⁾, Kenichiro Agemizu⁴⁾, Jun Konno⁵⁾, Katsuhiko Kashiwazaki⁶⁾

Center of Liberal Arts Education, Ryotokuji University¹⁾

Department of Judotherapy and Sports medicine, Faculty of Health Science, Ryotokuji University²⁾

Ryotokuji Medical College³⁾

Department of Physical Education, Tokai University⁴⁾

Department of Humanities & Sciences, Nihon University⁵⁾

Department of Physical Education, International Budo University⁶⁾

Abstract

The purpose of this survey is to provide a direction for Japanese Judo to take and suggestions for Judo MIND Project, which was started on April 1st in 2014, following the previous survey of Yamada et al., “A Survey on Consciousness of Judo Renaissance Project: A case study of the participants in the 2010 Judo Renaissance Forum”. We collected opinions about the Judo Renaissance Project, which was a joint project of Kodokan and the All Japan Judo Federation from 2001 through 2011. Our questionnaire was distributed to participants in the Judo head coach meeting held at the Interscholastic Athletic Meet in 2010, in order to grasp their recognition of the Judo Renaissance Project, the project’s effects and matters necessary to Japanese Judo. The survey shows that the manners of participants in the project and the way of using the hall have improved, but it also shows that further improvements should be required regarding the manners of supporters, national team athletes and coaches. Compared with athletes of other sports, the manners of judo players and coaches need to be improved. 80 percent of the subjects felt the images of Judo had improved as a result of the Judo Renaissance Project. It is very important to keep these results in mind in order to well organize the Judo MIND Project for the future of Japanese Judo.

Keywords : Judo, Judo Renaissance, Interscholastic Athletic Meet, Judo Mind

I. はじめに

2013年年初より始まった全日本柔道連盟を取り巻く様々な不祥事が、柔道界のみならず、国内外を含めて世間の耳目を集める非常に大きな問題となったことは記憶に新しい¹⁾²⁾³⁾。そうした状況を打破すべく、8月には新日鐵住金株式会社の代表取締役会長である宗岡正二氏を新会長に据え、「変えねばならないことは徹底的に変え、変えてはならないものは、しっかり守り抜く」⁴⁾という方針の下、新たな体制が構築され、柔道界の信頼回復、並びに改めて柔道の素晴らしさを社会に対して発信していけるよう、様々な取り組みが行われている。その改革、改善の中核を担うべく、2014年4月1日に柔道MINDプロジェクト特別委員会が発足した。MはManners (礼節)、IはIndependence (自立)、NはNobility (高潔)、DはDignity (品格)を意味し、これら4つの単語を連ねたことには、柔道を行う者はこれら4つのことを守ってこそ「柔道家」と呼ばれるに相応しいのだということを明確に示そうという狙いがこめられている⁵⁾。またMIND自体は精神や心と言う意味であり、嘉納治五郎師範の精神に立ち返ろうという意味合いも含んでいる⁶⁾。2001年から2011年までの10年間、講道館と全日本柔道連盟との合同プロジェクトとして柔道ルネッサンス活動が展開され、⁷⁾ 競技面へ過度に傾注した柔道を自省し、嘉納治五郎師範が理想とした「柔道を通じての人間教育」、ひいてはその修行の究極の目的である「己を完成して、世を補益する」ことを目指した⁸⁾。柔道MINDは、この活動を発展、進化させた取り組みともいえ⁹⁾、両委員会の委員長も同じ山下泰裕氏(現全日本柔道連盟副会長)が担当している。そこで、前回の「柔道ルネッサンス活動意識調査～2010年柔道ルネッサンスフォーラム参加者を対象に～¹⁰⁾」に続き、2010年全国高校総合体育大会(以下インターハイ)柔道競技監督会議出席者に対しての意識調査を行い、高校の現場にて実際に指導をしている監督等の柔道ルネッサンス活動についてのイメージやその効果に関して実態把握と傾向を探り、今後の日本柔道界の立て直しに向けての示唆を得ることを目的として、本研究を行った。

II. 目的

本研究は、柔道ルネッサンス活動の認知・浸透度、そしてそれぞれの取り組みに関する実態を把握すると共に、効果的な活動内容を分析し、加えてその効果についてたずねることにより、今後の柔道界が目指すべき方向性について示唆を得ることを目的とする。山田らの柔道ルネッサンスフォーラム参加者に対しての意識調査に引き続き、直接現場にて高校生を指導するインターハイ出場校の監督が出席する監督会議にてアンケート調査を行い、その現状を把握する。そして今後集計を行う各部門（小学校、中学、大学、実業団ら）の指導者たちの結果との比較検討の資料とする。

III. 方法

1. 対象

2010年8月8～12日に沖縄県武道館にて開催されたインターハイ柔道競技監督会議参加者を対象にアンケート調査を実施し、88名より回答を得た。そのうちの男子競技監督会議参加者43名、女子競技監督会議参加者22名の計65名より有効回答を得た。回答者の内訳は男性61名、女性4名、平均年齢40.6±8.7歳、平均柔道歴29.8±7.9年、平均段位4.7±1.3段であった。

2. 調査方法

1) 調査日

2010年8月7日の男子競技監督会議及び8月9日女子競技監督会議にて

2) 質問紙による調査項目

2010年に当時の全日本柔道連盟会長である上村春樹氏の意向により、2001年から始まった柔道ルネッサンス活動を開始から10年を区切りに、打ち切るとの方針が出された。この決定を受け、これまでの活動に対する理解度や認知度、そして効果などを検証する調査の必要性が柔道ルネッサンス特別委員会内で討議された。また、連盟トップの判断に対して実際の現場を預かっている指導者の柔道ルネッサンス活動継続についての意向も併せて調査することとなった。またこれまで活動に対して肯定的な意見は聞かれるものの、実際の印象や効果について調査した研究は行われていないため、柔道ルネッサンス委員会内にて挙げられた項目をもとに質問用紙を作成した。活動内容に対する一般的な認知の有無、その活動の基本理念の理解の有無及び活動内容の認知度、また代表的な活動（大会等でのスピーチ、横断幕掲示）に対する印象、実際の活動に対する指導者たちの取り組み、選手のマナーや観客の応援マナー、会場使用のマナー、そして活動による効果の有無、日本柔道を代表するナショナルチームの指導者や選手達のマナー変化や他競技と柔道選手、指導者のマナーの印象、柔道ルネッサンス活動の浸透具合に関する印象や効果、継続の必要性などについての印象を問う質問用紙を作成し、委員会の承認を経てアンケート調査を実施した。回答については5段階尺度を用い、一番当てはまると思われるものの単一回答を依頼した。（文末にアンケート用紙を添付。）

3) 統計分析

各質問に対する回答について単純集計を行った。併せて質問①「柔道ルネッサンスの内容を理解していますか」に対しての回答により、理解群（理解している、まあ理解している）とそれ以外群（どちらともいえない、あまり理解していない）に分類し、質問⑥「柔道ルネッサンスに積極的に取り組んでいますか」に対して取り組んでいる群（取り組んでいる、まあ取り組んでいる）とそれ以外群（どちらともいえない、あまり取り組んでいない）に分類し、それぞれにおいてクロス集計を

行った。統計的検定にはカイニ乗検定を用い、統計上の有意水準は $p < 0.05$ とした。

IV. 結果と考察

アンケート対象者の競技歴に関しては全国大会出場レベルが44%と過半数近くを占め、それ以上の競技歴（全国大会入賞29%、国際大会出場17%）を持つ者を含めると90%となり、全般的に競技歴の高い対象群であると言える（図1）。

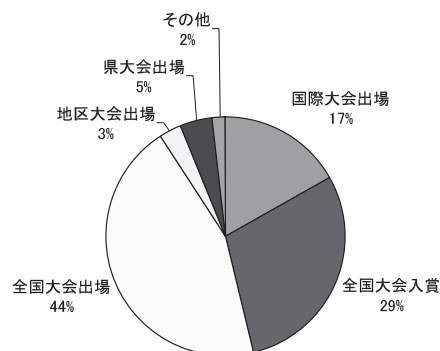


図1. 競技歴について

指導状況に関してはインターハイの監督会議参加者を対象としている為、高校での指導を行っている者が無回答を除いた98%を占め、重複指導先として町道場での指導が3%、中学が13%、大学2%であった（図2）。

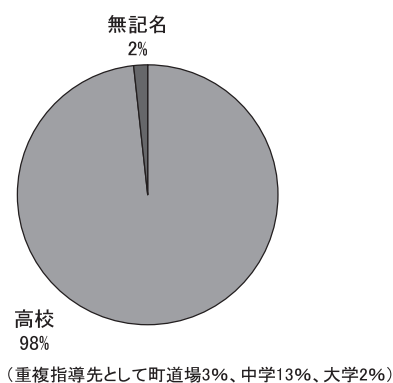


図2. 指導状況について

1) 柔道ルネッサンスの理解・認知度について

柔道ルネッサンスの内容について「理解している」69%と非常に高い割合を占め、「まあ理解している」25%を合わせると9割を超えていた（図3）。また柔道ルネッサンスは「嘉納治五郎師範が唱えた柔道の原点に戻る」ことを基本として活動を行っている事についても、「知っていた」71%、「まあ知っていた」23%と合わせて94%が認識していると回答しており（図4）、全般的な理解・認知度は高いものであった。

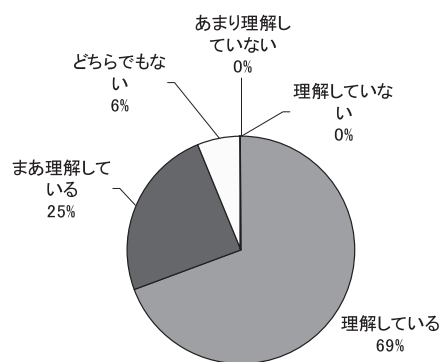


図3. 柔道ルネッサンスの内容の理解

続いて柔道ルネッサンスで行ってきた個々の活動に関する認識度については、スピーチ（95%）、横断幕の掲示（86%）、マナー向上の啓発（75%）の順に認識度が高く、7割以上の結果であったものの、募金（6%）、障害者柔道の支援（17%）、女子柔道支援（23%）等については開催頻度や直接関係する機会が少ない事などもあり、認識度は3割に満たない結果であった。（図5）。これらの活動の認知度向上に向けて、活動及び広報等の充実が望まれる。

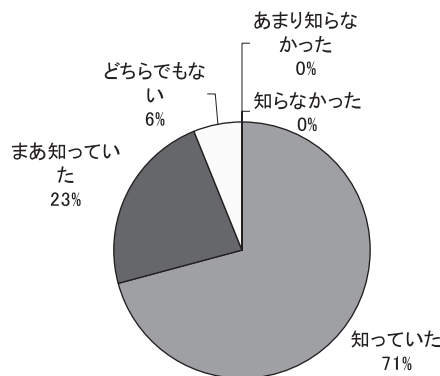


図4. 活動の基本理念についての認識

また代表的な活動として認識されているスピーチと横断幕掲載の必要性についての質問に対して、共に「必要である」、「まあ必要である」とその必要性を認識している割合が8割を越える結果であり、必要な活動として認識されている事が伺える結果であった（図6, 7）。

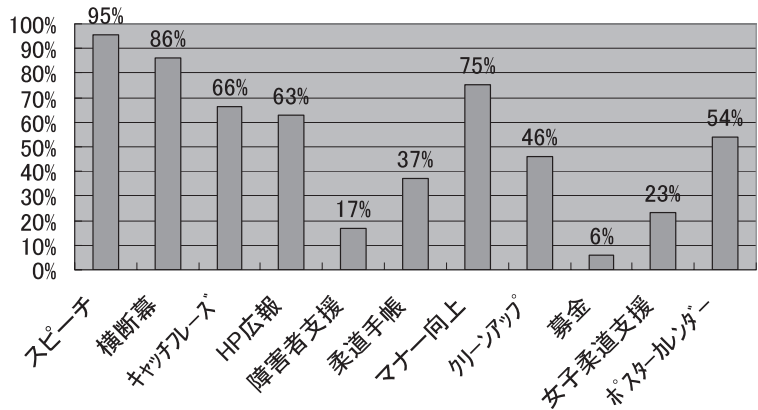


図5. 活動の認識度

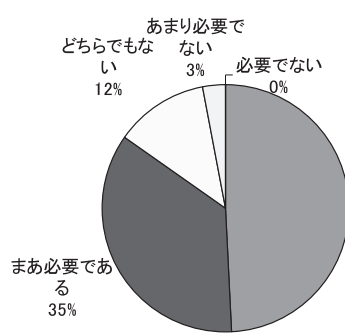


図6. スピーチについて

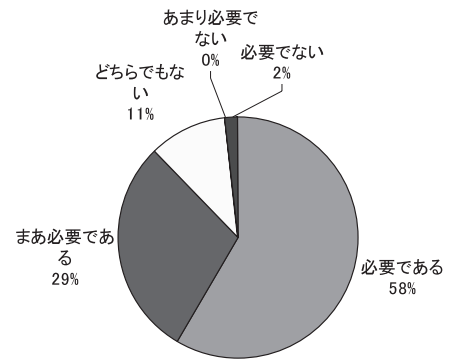


図7. 横断幕について

2) 柔道ルネッサンスによる変化についての意識

柔道ルネッサンスの柔道界への浸透度については、内容や理念の理解の9割を超える回答に比べると、「浸透している」、「まあ浸透している」を合わせても7割に止まる結果であったものの、約10年間の活動に対する一定の成果が示唆される結果であった（図8）。

こうした状況の下、柔道ルネッサンスによる柔道界への変化については、選手のマナー、大会会場の使用マナーについては、共に「良くなった」、「まあ良くなった」をあわせて、8割近くの者が良い変化があったと回答しており、良い影響を受けていることを示唆する結果であった。（図9、10）。

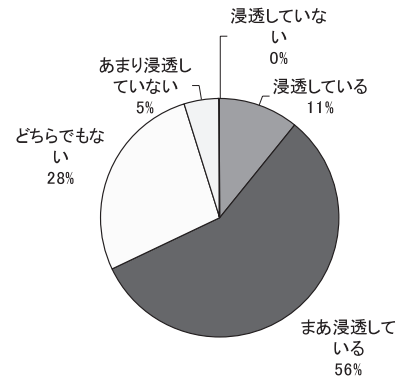


図8. ルネッサンス活動は浸透しているか

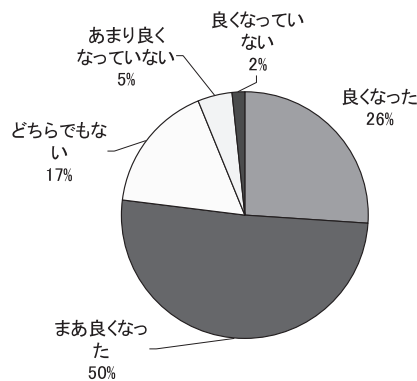


図9. 選手のマナーについて

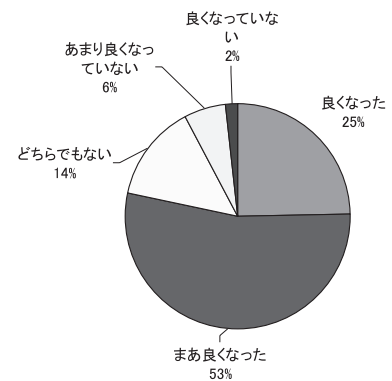


図10. 大会会場使用マナーについて

そしてこれらの結果が反映している通り、柔道ルネッサンスにより、柔道界は良い変化をしたかについても、「良くなった」23%、「まあ良くなった」51%の回答で8割程度を占めており、ポジティブな影響を与えていることが示唆されている結果であった（図11）。

しかしながら、これらの結果と比べると観客の応援マナーについては、「良くなった」15%、「まあ良くなった」32%の肯定的な回答を合わせても過半数には届いておらず、「どちらでもない」との回答が4割を超えていることから、応援マナーについては良い影響は与えているものの、未だ改善点を多く抱えていることを示唆する結果であった。（図12）。

加えて、強化選手及び強化指導者のマナーの変化についての回答では「どちらでもない」の回答が共に4割前後を占めており、これは強化選手との交流がないため、詳しくは分からないとの意見も反映されての結果であると考えられる。（図13、14）。

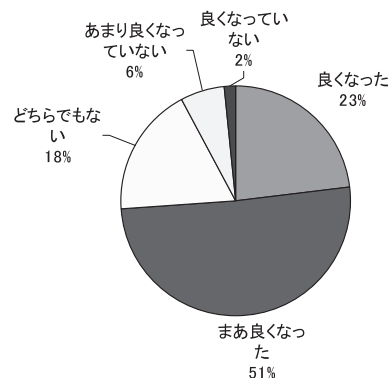


図11. 柔道界は良い変化をしたかについて

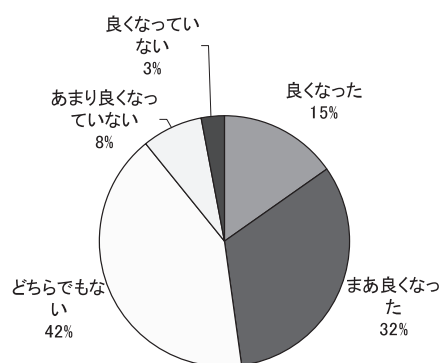


図12. 観客の応援マナーについて

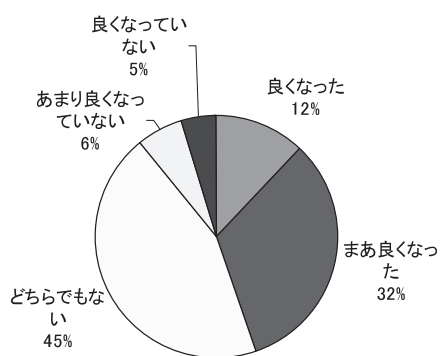


図13. 強化選手のマナーについて

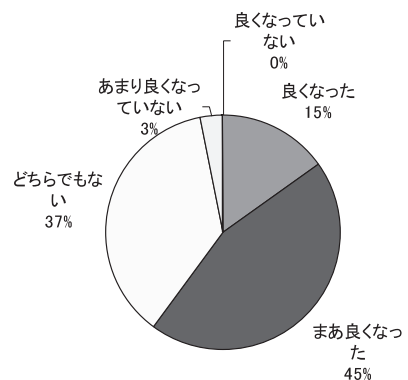


図14. 強化指導者のマナーについて

しかしながら、選手に対しての肯定的な変化の割合が指導者に対してのものより低い値を示しており、また一般的な選手の変化と強化選手の変化の肯定的な回答にも開きがあり、日本を代表する強化選手たちのマナーの変化に対しては、改善の余地を残していることが示唆される結果であった。また一般的な柔道選手及び柔道指導者のマナーを他競技と比べた場合、一般的に柔道選手のマナー及び指導者のマナーは他の競技と比べて良いと思いますかの間について、「どちらでもない」、「あまり良くない」、「良くない」の回答で共に6割前後を占めており、マナーについて他競技に比べて誇れる状態ではないことが推察される。なかなか比べ辛い設問ではあるが、柔道を志す者のマナーについて胸を張って良いと言える状況ではないことは明らかであり、今後、改善すべき点であると思われる（図15、16）。指導者自身の回答がこうした結果であるということは、自分達の状況を認識しつつも改善できていないことが伺える結果であると考えられる。

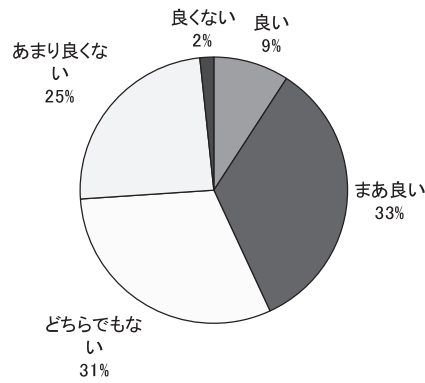


図15. 柔道選手のマナーは他競技と比べて

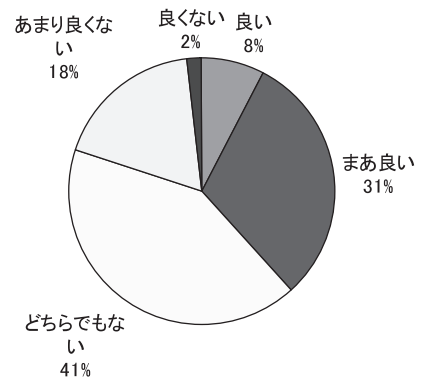


図16. 柔道指導者のマナーは他競技と比べて

3) 柔道ルネッサンスに対する指導者の意識と態度

柔道ルネッサンスに積極的に取り組んでいるかについては、積極的に「取り組んでいる」51%、で半数を超えており、教育の場である学校での部活動において、柔道指導のみならずルネッサンスについての活動も行われていることが伺えた。「まあ取り組んでいる」38%を合わせて、積極的な取り組みをしている者がほぼ9割に近い結果であった。しかしながら「どちらでもない」8%、「あまり取り組んでいない」3%との回答もあり、これらの数値を改善することが実質的な柔道界が受けるイメージの改善に大きく関係していくのではないと思われる。(図17)。

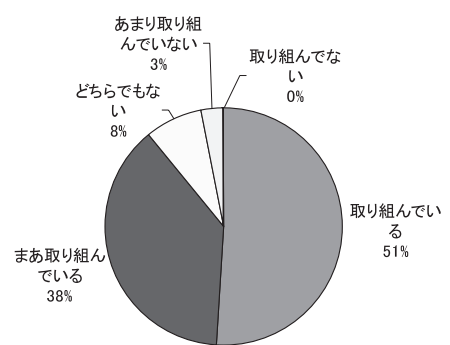


図17. 積極的に取り組んでいるか

また、ルネッサンス活動により、柔道に対する意識が「良くなった」38%、「まあ良くなった」45%を含めて8割近い者が肯定的な変化を感じているという結果であった(図18)。

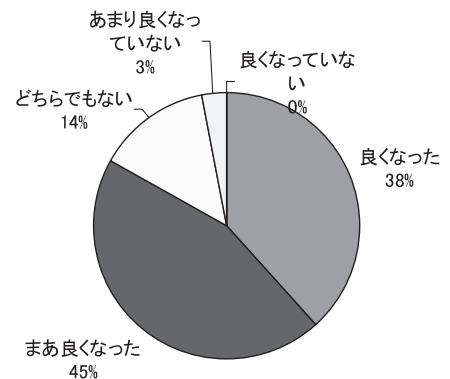


図18. ルネッサンスによる柔道に対する意識変化

柔道ルネッサンスは今後も継続していく必要があると思いますかとの問に関して、「必要である」と回答した者が70%を占め、「まあ必要である」23%を合わせて9割以上の回答者が今後も活動を続ける必要性を感じているという結果となった(図19)。

このように柔道ルネッサンスにより柔道に対する意識の向上が見られ、活動継続の必要性が強く望まれる結果であったことは、今後の活動の充実や必要性を探る上でも重要な意見であると言える。

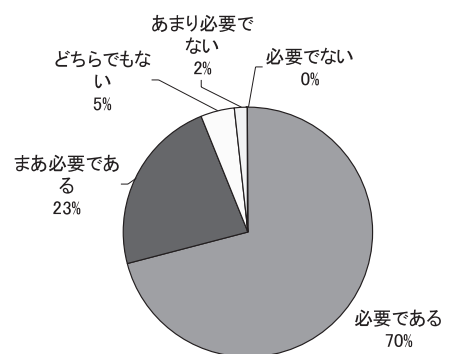


図19. ルネッサンスの今後の継続について

4) 柔道ルネッサンスの理解度と変化に対する意識の相関関係

柔道ルネッサンスの理解度と柔道ルネッサンスによる変化に対する意識の相関をみている。質問①「柔道ルネッサンスの内容を理解していますか」に対しての回答により、理解群（理解している、まあ理解している：N=61）とそれ以外群（どちらともいえない、あまり理解していない：N=4）に分類し、カイ二乗検定を行い、統計上の有意水準は $p < 0.05$ とした。質問⑦の選手のマナーの変化について「良くなっていない」と回答した割合が、理解群に対してそれ以外群の方が有意に高い数値を示した（ $p < 0.01$ ）。活動に対する理解が低い者の方が、選手のマナーに対する正の影響が少ないと捉えていると思われる。（図20）

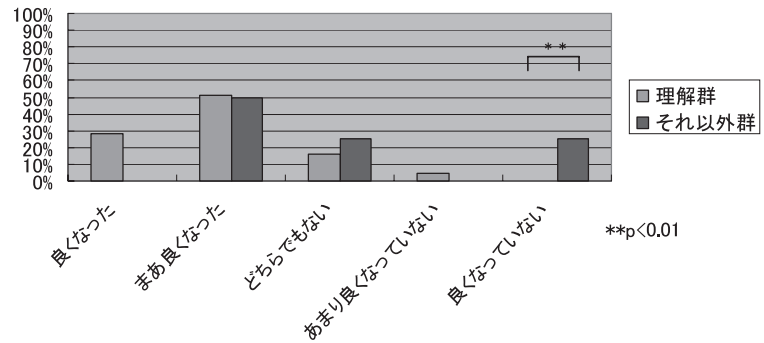


図20. 理解群とそれ以外群の選手のマナーについての比較

質問⑧の観客の応援マナー変化について「良くなっていない」と回答した割合が、理解群に対してそれ以外群の方が有意に高い数値を示した（ $p < 0.01$ ）。活動に対する理解が低い者の方が、応援マナーの良い変化の影響が少ないと捉えていると思われる。（図21）

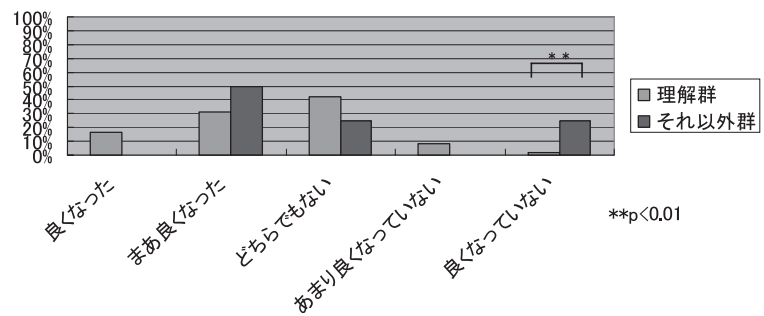


図21. 理解群とそれ以外群の観客の応援マナーについての比較

質問⑨の大会会場使用マナーの変化について「良くなっていない」と回答した割合が、理解群に対してそれ以外群の方が有意に高い数値を示した（ $p < 0.01$ ）。活動に対する理解が低い者の方が、大会会場使用に対する正の影響が少ないと捉えていると思われる。（図22）

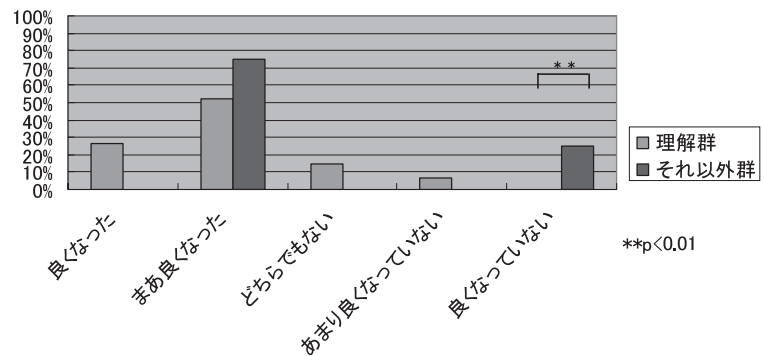


図22. 理解群とそれ以外群の大会会場使用マナーについての比較

質問⑩の柔道界は良い変化をしたかについて「良くなっていない」と回答した割合が、理解群に対してそれ以外群の方が有意に高い数値を示した(p<0.01)。活動に対する理解が低いの方が、柔道界への良い影響に対してネガティブに捉えていると思われる。(図23)

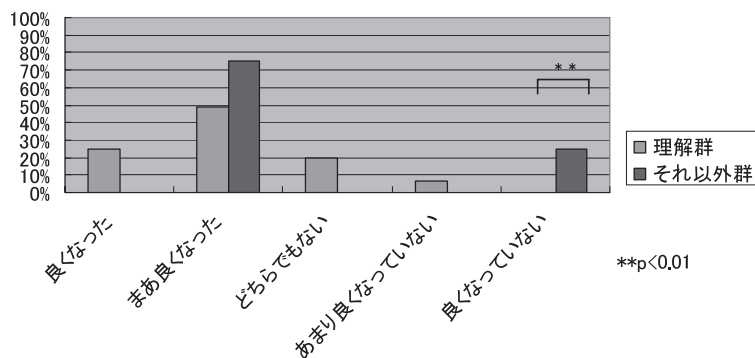


図23. 理解群とそれ以外群の柔道界への良い変化についての比較

このように活動に対する理解度の低い群の方が「選手のマナー」, 「観客の応援マナー」, 「大会会場の使用マナー」, 「柔道界への良い変化」の質問に対して、有意にネガティブな回答を示している結果であった。理解度を向上させることと肯定的な変化についてこのように多くの項目で相関が認められることから、活動の充実と共に更なる理解度、認知度向上の必要性が感じられた。

5) 柔道ルネッサンスの理解度と指導者の意識・態度との相関関係

質問⑬の柔道選手のマナーは他競技の選手と比べてどうかについて「良くない」と回答した割合が、理解群に対してそれ以外群の方が有意に高い数値を示した(p<0.01)。活動に対する理解が低いの方が、他競技と比べて柔道選手のマナーに対してネガティブに捉えていると思われる。(図24)

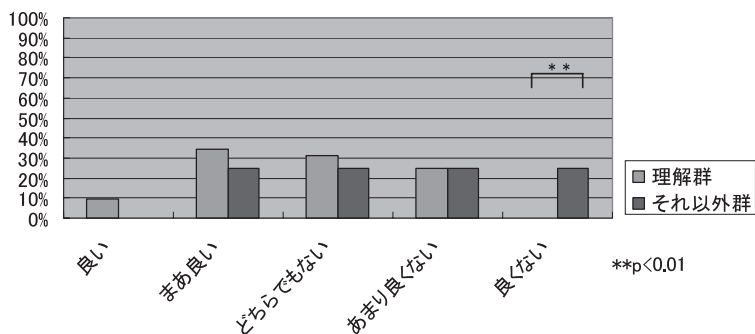


図24. 理解群とそれ以外群の柔道選手のマナーと他競技と比べてどうかについての比較

質問⑭の柔道指導者のマナーは他競技の指導者と比べてどうかについて「良くない」と回答した割合が、理解群に対してそれ以外群の方が有意に高い数値を示した(p<0.01)。活動に対する理解が低いの方が、他競技と比較した際、柔道指導者のマナーに対してネガティブに捉えていると思われる。(図25)

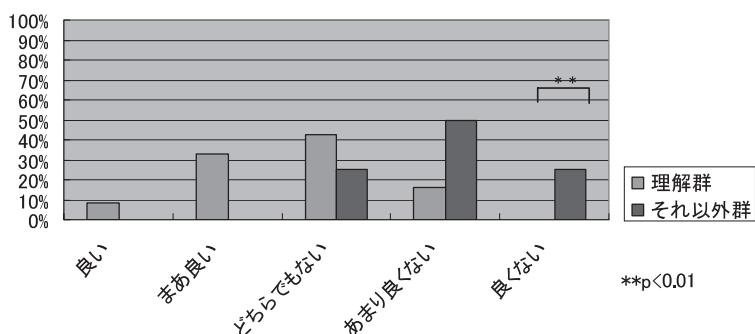


図25. 理解群とそれ以外群の柔道指導者のマナーを他競技と比べての比較

また、有意差こそみられなかったものの理解群とそれ以外群ではルネッサンスへの積極的な取り組みに対してそれ以外群には「取り組んでいる」という回答がなく、どちらでもないとの回答が半数を占めた。

このように活動に対する理解度の低い群の方が「柔道選手のマナーを他競技と比べて」, 「柔道指導者の

マナーを他競技と比べて」の質問に対して、有意にネガティブな回答を示している結果であった。指導者の意識・態度に関してもルネッサンスから受ける変化と同様、理解度が低い場合にネガティブに捉えていることが示唆される結果であり、理解度を向上させることと指導者の意識・態度についても相関がみられるので、活動の充実と共に更なる理解度、認知度の向上の必要性が感じられる。

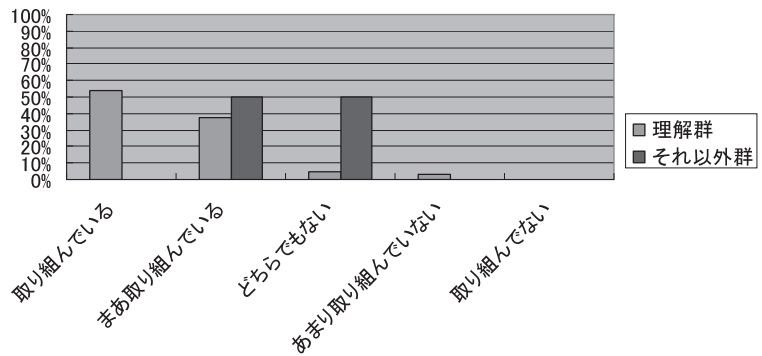


図26. 理解群とそれ以外群の取り組みについての比較

続いて、質問⑥「柔道ルネッサンスに積極的に取り組んでいますか」に対して取り組んでいる群（取り組んでいる，まあ取り組んでいる：N=58）とそれ以外群（どちらともいえない，あまり取り組んでいない：N=7）に分類し、カイ二乗検定を行い、統計上の有意水準は $P < 0.05$ とした。分析の結果、全ての項目において有意差は見られなかった。しかしながら取り組んでいる群の方が、それ以外群に比べて、ほぼ全ての項目においてルネッサンス活動の効果等を肯定的に捉えている傾向が見られた。

6) 自由記述の分析

主なコメント

- (1) 時間が必要であったり、お金が必要であったりと大変なことが多いと思いますが、今後も姿を変えつつ絶対必要である
- (2) 継続的な指導と指導者の意識向上が必要である
- (3) 子供の教育上、大変有意義な活動であると考え
- (4) 指導者がガムを紙ながら指導している所やアップ会場でのごみの処理が各高でなされていない。選手の試合態度など改善点が多いのではないかと
- (5) 柔道ルネッサンスを指導者にも教えてあげないといけない。ということがとても悲しいことだと思います。ルネッサンスには広い活動や考えがありますが、マナーの低下は指導者の問題かと思えます。競技力を向上させる事と人物を育てることを私も含め、両立させていく指導を心掛けるようにしていきたいと思えます。

全般的に柔道ルネッサンスの継続を求める意見や活動に対しての肯定的な意見が多い ((1)-(3))。また、指導者自身としての自省や自戒を感じている回答も多く、指導者として現在の柔道界を形成してしまったことに対する責任を感じ、今後の改善を即すコメントも共通して見られた。((4), (5)) こうしたコメントから読み取れる状況が高校指導現場での現状であり、指導者としての責任とその義務を遂行出来てない現状を改善すべく、柔道ルネッサンスの継続を望む意志が汲み取れる内容であった。

V. まとめ

本研究では、2010年8月8～12日に沖縄県武道館にて開催されたインターハイ柔道競技監督会議参加者を対象にアンケート調査を行い、2001年より10年間行われた柔道ルネッサンスについての認知・浸透度、

取り組実態の状況を把握し、効果的な活動内容を分析することにより、今後の柔道界が目指すべき方向性について示唆を得ることを目的として実施した。

1. 「柔道ルネッサンスの内容や基本理念」については共に9割以上の理解が得られていた。
2. 具体的な活動の認識度については、「スピーチ」、「横断幕の掲示」、「マナー向上の啓発」、などは7割以上の認識度であったが、逆に「募金」、「障害者柔道の支援」、「女子柔道セミナー支援」等については、3割に満たない結果であった。また「スピーチ」、「横断幕の掲示」というルネッサンスを代表する2つの活動については、8割の者がその必要性を認識している結果であった。
3. 「選手のマナー」、「大会会場使用のマナー」については改善に向かっていることが示唆される結果であったが、「応援者のマナー」、「強化選手のマナー」については、更なる改善が望まれる結果であった。
4. 「柔道選手及び柔道指導者のマナー」について他競技と比べた場合、「どちらでもない」、「あまり良くない」、を合わせると共に6割前後となり、改善が必要との認識を持っている事がうかがえる結果であった。自由記述からも、現在のルネッサンス活動が必要とされる柔道界自体が問題であり、指導者たち自身に自戒と改善を促すべきとの意見も見られた。
5. 柔道ルネッサンスにより、柔道に対する意識は8割の者が「良くなった」、「まあ良くなった」ととらえており、柔道界にとって非常に有益な活動としてとらえられていた。
6. 柔道ルネッサンスの継続については、「必要である」、「まあ必要である」との回答を合わせて93%の者が必要であるととらえており、また自由記述においても同様の意見が多く見られ、その重要性和継続の必要性が強くうかがえた。
7. 質問①の回答により、ルネッサンス理解群（理解している、まあ理解している）とそれ以外群（どちらともいえない、あまり理解していない）に分類し、クロス集計及びカイニ乗検定の結果、質問⑦⑧⑨⑩⑬⑭においてそれ以外群の方が有意（ $p < 0.01$ ）にネガティブに捉えていることが見られた。つまり柔道ルネッサンス活動の理解度と変化に対する意識及び指導者の意識・態度に相関がみられ、活動の充実には理解度の向上に取り組む必要性が示唆された。
8. 質問⑥の回答により、柔道ルネッサンスに積極的に取り組んでいる群（取り組んでいる、まあ取り組んでいる）とそれ以外群（どちらともいえない、あまり取り組んでいない）に分類し、それぞれにおいてクロス集計及びカイニ乗検定の結果、有意差は見られなかった。しかしながら、取り組んでいる群の方が、それ以外群に比べて、ほぼ全ての項目においてルネッサンス活動の効果等を肯定的に捉えている傾向が見られた。

柔道ルネッサンスは、前回のルネッサンスフォーラム参加者同様、高校柔道界を牽引していると思われるインターハイ出場校の監督たちの間でも、2010年の時点で大きく浸透してきていることが伺われ、様々な正の効果をもたらしていることが推察できる結果であった。しかしながら、そうしたポジティブな効果と共に、指導者自身も含めた改善すべきさまざまな点が残されていることも伺える結果であった。そうした現況を改善すべく、改めてルネッサンス活動の必要性やその活動継続が強くと望まれている。こうした声に応えるためには、現在形を変えて始められた柔道MIND活動にこのような現場指導者の意見を反映し、更なる活動の発展と充実が図られることが重要である。また2014年10月に行われた長崎国体、12月に行われたグランドスラム東京大会においても、会場内にルネッサンスに関する横断幕が掲載されており、現在のMIND活動にルネッサンス活動のものが活用されている状況であった。地方や実際の指導現場ではルネッサンスとMIND、それぞれの活動の違いや関連性等について十分に浸透するには一定の時間が掛かる

ものと思われる。MIND活動の成功には今研究でも示唆された活動自体の理解度・認知度の向上を図ることが、それに関わる者のポジティブな変化や意識・態度に大きく寄与するものと思われるので、今後、実際の活動充実と同時に、広報活動への注力が望まれる。

今回のアンケートは、2010年の柔道フォーラム参加者に引き続いて、高校の指導者を対象にしたものであったが、今後も各修行段階における指導者に対して行ったアンケート調査の集計を分析し、更に傾向を明らかにして、柔道MIND活動等への参考や示唆を与えることを目指したい。

文献

- 1) 山口香 (2013) 日本柔道の論点, イースト新書, 111-116.
- 2) 松原隆一郎 (2013) 武道は教育でありうるか, イースト新書, 46-64.
- 3) 木村秀和 (2013) [柔道改革] 振興センター助成金問題中間報告を受けて. 近代柔道. 第35巻, 6号.
- 4) 宗岡正二 (2013) 全柔連だより. 全日本柔道連盟. VOL49, 1.
- 5) 全日本柔道連盟 (2013) 柔道MINDプロジェクト特別委員会の発足について
<http://www.judo.or.jp/p/32712>
- 6) 宗岡正二 (2014) まいんど. 全日本柔道連盟. VOL01, 26.
- 7) 講道館 (2001) 柔道ルネッサンスとは
http://www.kodokan.org/j_renaissance/
- 8) 山田利彦 (2010) 平成22年度「柔道ルネッサンスフォーラム」報告. 講道館柔道. VOL81, NO. 7, 69-72.
- 9) 日本武道祭 (2014) 現代武道紹介「柔道」. 日本武道館. 54-57.
- 10) 山田利彦, 金丸雄介, 石井孝法ほか (2014) 柔道ルネッサンス活動意識調査～2010年柔道ルネッサンスフォーラム参加者を対象に～. 了徳寺大学研究紀要. 8, 79-87.

(平成26年11月28日稿)

査読終了年月日 平成27年1月15日

柔道ルネッサンスに関するアンケート

・性別（ 男・女 ） ・年齢（ 歳） ・都道府県（ ）

・柔道歴（ 年） ・段位（ 段）

・競技歴（ 国際大会出場 全国大会入賞 全国大会出場 地区大会出場 県大会出場 その他
他 ）

・指導状況（ 町道場 中学 高校 大学 実業団 警察 その他
（ ） ）

① 柔道ルネッサンスの内容を理解していますか

1.理解している 2.まあ理解している 3.どちらともいえない 4.あまり理解していない 5.理解していない

② 柔道ルネッサンスは「嘉納治五郎師範が唱えた柔道の原点に戻る」ことを基本としてさまざまな活動を行っていますが、ご存知でしたか

1.知っていた 2.まあ知っていた 3.どちらでもない 4.あまり知らなかった 5.知らなかった

③ 柔道ルネッサンスで行ってきた下記の活動であなたをご存知のものに○をつけてください

1.スピーチ 2.横断幕の掲示 3.キャッチフレーズの募集 4.全柔連 HP での広報
5.障害者柔道の支援 6.柔道手帳の作成 7.マナー向上の啓発 8.クリーンアップ 9.募
金 10.女子柔道セミナー支援 11.ポスター・カレンダーの作成

④ 柔道ルネッサンスに関するスピーチについてどう思いますか

1.必要である 2.まあ必要である 3.どちらでもない 4.あまり必要でない 5.必要ではない

⑤ 柔道ルネッサンスに関する横断幕（会場等に掲示）についてどう思いますか

1.必要である 2.まあ必要である 3.どちらでもない 4.あまり必要でない 5.必要ではない

⑥ 柔道ルネッサンスに積極的に取り組んでいますか

1.取り組んでいる 2.まあ取り組んでいる 3.どちらでもない 4.あまり取り組んでいない 5.取り組んでいない

⑦ 柔道ルネッサンスによって選手のマナーは変わりましたか

1.良くなった 2.まあ良くなった 3.どちらともいえない 4.あまり良くなっていない 5.良くなっていない

⑧ 柔道ルネッサンスによって観客の応援マナーは変わりましたか

1.良くなった 2.まあ良くなった 3.どちらともいえない 4.あまり良くなっていない 5.良くなっていない

⑨ 柔道ルネッサンスによって大会会場の使用マナーは変わりましたか

1.良くなった 2.まあ良くなった 3.どちらともいえない 4.あまり良くなっていない 5.良くなっていない

⑩ 柔道ルネッサンスによって柔道界は良い変化をしたと思いますか

1.良くなった 2.まあ良くなった 3.どちらともいえない 4.あまり良くなっていない 5.良くなっていない

⑪ 柔道ルネッサンスによって強化選手のマナーは変わりましたか

1.良くなった 2.まあ良くなった 3.どちらともいえない 4.あまり良くなっていない 5.良くなっていない

⑫ 柔道ルネッサンスによって強化指導者のマナーは変わりましたか

1.良くなった 2.まあ良くなった 3.どちらともいえない 4.あまり良くなっていない 5.良くなっていない

⑬ 一般的に柔道選手のマナーは他の競技の選手たちと比べてどう思いますか

1.良い 2.まあ良い 3.どちらともいえない 4.あまり良くない 5.良くない

⑭ 一般的に柔道指導者のマナーは他の競技の指導者たちと比べてどう思いますか

1.良い 2.まあ良い 3.どちらともいえない 4.あまり良くない 5.良くない

⑮ 柔道ルネッサンスは柔道界に十分浸透していると思いますか

1.浸透している 2.まあ浸透している 3.どちらでもない 4.あまり浸透していない 5.浸透していない

⑯ 柔道ルネッサンスによってあなたの柔道に対する意識は変わりましたか

1.良くなった 2.まあ良くなった 3.どちらともいえない 4.あまり良くなっていない 5.良くなっていない

⑰ 柔道ルネッサンスは今後も継続していく必要があると思いますか

1.必要である 2.まあ必要である 3.どちらでもない 4.あまり必要でない 5.必要ではない

柔道ルネッサンスについてご意見等ございましたら自由に記載ください。

--

ご協力ありがとうございました。